

## 「デラシネ論争」「ポプラ論争」の余白に：ジッド とルイ・ルアールの往復書簡

吉井, 亮雄  
九州大学大学院人文科学研究院：教授

<https://doi.org/10.15017/26094>

---

出版情報：Stella. 31, pp.287-298, 2012-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン：  
権利関係：



# 「デラシネ論争」「ポプラ論争」の余白に

——ジッドとルイ・ルアールの往復書簡——

吉 井 亮 雄

モーリス・バレス著『デラシネ』の評価をめぐる「デラシネ論争」、これに続き主としてシャルル・モーラスとジッドとのあいだで起こった「ポプラ論争」は、19世紀末から20世紀初頭にかけてパリ文壇を賑わせた出来事として一般にもよく知られている。単に文学的な次元にとどまらず、思想・宗教上の対立が象徴的に顕れた事例であるが、幸いにも筆者は最近、一件に関連してジッドが受けた書簡と彼の返信を参照する機会をえた。標題にも謳ったように、本稿の目的はこの未刊書簡2通の紹介という一事に尽きるが、その訳出・提示にあたっては、当該資料を時系列で捉えられるようにと考え、周知の情報であるのは承知のうえで、あえて両論争の経緯を前後に補足するかたちを採る。読者諸氏におかれては、この選択をあらかじめ諒とされたい。

\*

1897年秋、バレスの『デラシネ』が刊出する。小説の半ばあたり、「テーヌの樹」(初版では「テーヌのレメルスパシェ訪問」と題された第7章では、ロレーヌ地方出身の故郷喪失者のひとり、レメルスパシェが哲学者・文学史家イポリット・テーヌの訪問を受け、彼に誘われてアンヴァリッド公園の広場にある一本のプラタナスを見にゆく。樹木が放つ生命力の横溢はテーヌの賞翫してやまぬところだった——「この樹は一個の見事な存在の具体的な顕れです。それは不動停滞ということを知りません。[...]このどっしりと茂った緑の葉は、見えざる条理、すなわち人生における必然の承認という崇高な哲学に従っています。己を否定することなく自暴自棄に陥ることもなく、この樹は現実の与えた諸条件のなかから最良最大の利益を引き出してきたのです」<sup>1)</sup>。だがバレスの

筆になるこの場面は、作家ポール・ブルジェの実体験にもとづくものであった。じっさいブルジェは、同年11月7日の『フィガロ』紙上でみずから逸話の真正性を確認・保証し、つづいて十分な紙幅を割きバレスの新作に好意的な評価を下している<sup>2)</sup>。

時を同じくして名のおった他の文学者・批評家もバレスの新作を論じたが、彼らのほうは、程度の差こそあれ、いずれもが批判の色を隠さなかった。たとえば11月20日付『青色評論』に寄稿したエミール・ファゲは、作品の社会的な方向性に理解を示しつつも、物語展開の退屈、哲学的議論の冗長を惜しんでいる。ともに同月15日発行の『白色評論』『両世界評論』に筆を執ったレオン・ブルムとルネ・ドゥーミックの場合はさらに手厳しく、小説の主題それじたいを組上に載せる。とりわけ後のアカデミー・フランセーズ会員ドゥーミックは、教育の本義とはむしろ「あらゆる視野の制限を超える高みへと我々を育て上げ」、「我々を〈デラシネ〉な存在にする」ことだと説いて、バレス的命題に異を唱えたのである<sup>3)</sup>。

作家の盟友をもって任ずるモーラスはこの文言に憤慨し、翌月の『ルヴュ・アンシクロペディック』誌で次のように糾弾する——「なにゆえにこの教授は我々を嘲笑するのか。バレス氏は彼にこう訊ねるだけで事足りよう、すなわちポプラがどんなに高く成長しようとも、いったい何時それを根こそぎにする必要があるのか、と」<sup>4)</sup>。かくてモーラスは、バレスが語ったテーヌのプラタナスからポプラへと話題を移し、みずから議論を「樹木栽培」の次元へと導いていたのである。

この時期までのジッドとモーラスの交わりは、間遠ではあったが、けっして敵対的なものではなく、むしろ相互の共感に支えられていたと言ってよい。後者はしばしばジッド作品を書評の対象に選んでいたし（特に処女作『アンドレ・ワルテルの手記』や『鎖を離れたプロメテウス』『カンダウレス王』には賛辞を惜しまなかった）、ドレフュス事件にさいしての立場の相違もふたりの関係を大きく損なうことはなかった。またジッドは1898年2月、『レルミタージュ』に「『デラシネ』について」<sup>5)</sup>を載せた時点では上記のドゥーミック批判を読んでいなかった。そのため論文の内容は、もっぱら教育と個々人の成長にかんするバレス＝テーヌの主張を受けての議論にとどまり、モーラスとの対立の種となることもなかったのである。

ジッドがモーラスのドゥーミック批判を知ったのはそれから4年半後（1902年7月）、バレスが新著『国家主義の舞台と教義』のなかで引用した一節によってであった<sup>6)</sup>。これがひとつの契機となってジッドは翌年、評論集『プレテクト』（1903年6月刊）を編むにあたり、かつての『デラシネ』論に新規の註をくわえ、園芸手引書や種苗専門店の目録を援用しながら、樹木栽培にかんする論敵の誤った術語使用を正すことになる（当該分野では動詞«déraciner»は常に「根を移しかえる」を指し、「根を切る」の意味で用いられることはない、というのがその骨子<sup>7)</sup>）。

バレス上掲著の読書体験と『プレテクト』出版との時期的な隔たりから察せられるように、新註の追加にはその間の経緯もまた大きく与っていた。ごく手短かに事の次第を述べると、ジッドがアドリアン・ミトゥアールの依頼に応じ『ロクシダン』誌1902年11月号に「ノルマンディーとバ・ラングドック」を發表したのが発端となる。このエッセイは、ノルマンディー／ユゼスという優れてジッド的な二項対立にもとづき、直接の名指しは避けつつも、バレスの「アンラシスマン根づきの教義」に再度の反駁をくわえ、あわせて文化的混淆の豊穡さを説くものであった<sup>8)</sup>。これを読んだモーラスの反応は素早く、翌年1月11日、王党派系の新聞『ガゼット・ド・フランス』に「ふたつの故郷」と題する論文を載せ、「読者の思考を混乱に導く」とジッドを非難する。また自身の出身地にあるサント＝ボヌ山脈を誇るべき例として引いて曰く、「ひとつの地域はすでにそれ自体が、多極で姿定まらぬ故郷にとって代わりうるだけの多様性を有しているのだ」。そしてテキストを結ぶのは次のような辛辣・皮肉な言葉だった——「ジッド氏は永遠とわの眠りにつく場所を選んでいるのだろうか。この墓所の選択こそが彼に真の故郷の何たるかを教えることになるろう」<sup>9)</sup>。ジッドにとってはまさに予期せぬ第三者の介入であったが、それだけになおのこと彼の批判は一時いつときバレスから離れて、小さからぬ苛立ちとともにモーラスへと向うことになるのである。

以上を『プレテクト』出版までの大まかな前史とし、ここで本稿の眼目たる、同書献呈時にジッドとルイ・ルアール（1875-1964）との間で交わされた2通の未刊書簡を訳出・提示することにしよう。献本にたいして礼状を送ったルイは、著名な絵画収集家アンリ・ルアールの四男で、後に出版社「カトリック芸術」を興した人物<sup>10)</sup>。次兄のウージェーヌは早くからジッドと肝胆相照らす

仲であったが（両者の大部な往復書簡集が数年前に公刊されている〔後註参照〕）、このルイのほうは作家と<sup>そ</sup>反りが合わず、とりわけその宗教的選択に否定的な姿勢をとり続けた。当然ジッドのほうでも彼への評価は厳しく、「粗暴にならなければ率直になれないと考えている連中のひとり」<sup>11)</sup>とまで言い切っている。このような両者の書簡交換だけに、礼節は保ちながらも、互いの語調は自ずから険しいものにならざるをえない。まずはパリ大学附属ジャック・ドゥーゼ文庫現蔵のルアール書簡<sup>12)</sup>——

セーヌ＝エ＝オワーズ県ラ・クー＝アン＝ブリ

1903年7月19日、日曜

親愛なるジッド

たしかに〔フェドール・〕ローゼンベルグに手紙を書いた時点では<sup>13)</sup>、私はまだご高著〔『プレテクト』〕を落手していませんでした。それはひとえに郵便の遅れのためで、数日後になってようやく再版を心待ちにしていた『アンジェルへの手紙』を再読できたという次第。すぐにお礼を申し上げなかったのも、ゆっくりと時間をかけて長い手紙を認め、ご意見・お考えのすべてについて、どれひとつ漏らすことなく貴方と議論できればと望んでいたためです。しかし残念ながらこの大仕事は断念せねばなりません。それは貴方をうんざりさせる代物となったに相違ありませんし、私としては『ロクシダン』誌でご高著を論評するのによしといたしましょう<sup>14)</sup>。申し上げねばならないでしょうか、親愛なるジッド、貴方の物の見方は私のそれとは必ずしも同じでないことを。そして私の危惧するところ、貴方のすばらしい作家的才能や、魅力に溢れた文章、また思想の細やかなニュアンスをしなやかに描き出すその技に感嘆しながらも、私が貴方と完全に理解し合うのは不可能だろうということを。我々の精神、我々の性格はあまりにも異なっているのです。貴方と度々交わした会話に甘美な思い出を抱いているだけに、そのことは私にとってまことに大きな悲しみですが、これが定めというものです。文学における影響にかんする貴方のご意見だけは理屈抜きに私の承服するところ。貴方はまさに主張すべきことを述べられたのであり、また誰一人として貴方ほど巧みには語れなかったでしょう。〔しかし〕失礼ながら申し上げれば、デラシネ説への貴方の反論は、幼稚とまでは言わぬまでも、まったく皮相的な反論であると思います。貴方がなさるように専門書を引き合いに出し、互いになら問題を進展させず際限なく相手の説に反駁しつづけることもできましょう。貴方は樹木栽培やヴィルモラン〔ヴィルモラン＝アンドリウーの園芸手引書〕の権威に頼っておいでですが、我々としては貴方に昆虫学や動物学、〔アンドレ・〕サンソンやファーブルの著作を喚起するといった子供っぽい真似はいたしますまい。デラシヌマン、アンラシヌマンはともに様々な感情を我々のうちに呼び起こす強力なイメージではありますが、しかしながらあらゆるイメージと同様、そのいずれもが文字ではなく霊によって〔表面的な意味ではなくその深く意図するところによって〕理解されるべきものなのです。

あるいはこちらの言い方のほうがお好みでしょうか、どちらのイメージも、激しい敵意を抱いた知性に切り刻まれるのではなく（なぜならばその場合イメージは力の大半を失ってしまうからです）、共感をともなった知性によって解されるべきものなのです。芸術作品についても、ひいては何事についても然り、ではないでしょうか。貴方と私を隔てるもの、それはとりわけ知性観の大きな相違だと思えます。私にとって知性とは、まさに信仰（それがどんな信仰であれ）や信念の支え、感情や感受性・熱情の基盤そのものであって、無数の観念を操り理屈を捏ねまわして決してひとつの確信に身を定めぬための方便ではありません。バレスの全著作に一貫する思想、それを貴方はただ一語に還元するほどまで狭く捉えておられますが、たしかに彼の思想は優美さや機知を欠き、また表明の仕方も巧みではないとしても、そこには希望や必然・情熱が満ち溢れています。無条件には言えぬまでも、〔少なくとも〕20世紀のフランス人青年層にとっては十分に真実たりうる思想なのです。親愛なるジッド、どうか私の言葉を信じてください、いかに貴方の才能をもってしても、〔影響の受け手からの〕宿命的・必然的な反作用、ご自身が芸術や文学において有用だとあれほど見抜いておられる反作用を止め遮ることはできないのです<sup>15)</sup>。だからこそ、我々の国家主義のごとくかくも豊穡で感動的な教義の表面的な欠点を見咎めるはお止めいただき、フランス語を愛するすべての教養ある国家主義者を喜ばせるため、叙情的で陰翳に富んだジャン・ラシーヌ論を『レルミタージュ』誌に（『ロクシダン』誌のほうはすでに貴方の名声を危うくしたことです<sup>16)</sup>）ご寄稿ください。じっさい、古典作家たちこそが芸術や文学の新たな復興を今後導いてゆくのではないのでしょうか。親愛なるジッド、貴方の美質はすべてフランス文化に由来すること（〔ペルシア詩人〕ハーフェズや『千夜一夜物語』の翻訳者）マルドリユスなどは取るに足らず<sup>17)</sup>、それを否定なさることはできません。ではなにゆえ貴方は普遍的な文化、ジャリ風に言えば脳なし文化の必要性をお説きになるのでしょうか。理由も分からぬまま絶えず変質し、やがては無に至ってしまうのではなく、我々は現在、そして今後も末永く我々固有の特質を維持するよう努めねばならないのです。

一気に書き上げた、おそらくは少々内容の不明瞭な本状をどうかご容赦のほど。

妻と私は、お身内のご不幸の事を知り、深く心を痛めております。奥さまにも妻が同便でお手紙を差し上げます<sup>18)</sup>。

親愛なるジッド、意見の対立・不一致はあれども、私の厚き友情と、そして貴方の思想にたいするとは申しぬまでも貴方の才能にたいする私の偽りなき賛嘆の念をどうかお信じいただきたく。

ルイ・ルアール

この書簡を受けたジッドは、自身の正当性を主張すべく、日を置かず返書を送った。残念ながらその末尾は失われ残っていないが、ルアール書簡の記述内容や論旨展開に照らすかぎり、オリジナルの主要部分はほぼカバーしているものと思われる<sup>19)</sup>——

キュヴェルヴィル, [1903年] 7月21日

親愛なるルイ

私がヴィルモラン〔の園芸手引書〕を引用するのは、パレスへの反論のためではなく、モーラスがドゥーミックに向けた馬鹿げた暴言に反論するためです（ドゥーミックを弁護することになろうとは私自身ひどく驚いています）。貴方と同じく私もまた、ここで樹木栽培のことを引き合いに出すのは大人げないことだと思います。だからこそ〔私は訝るのです〕、なにゆえモーラスは〔自分のほうから先に〕樹木栽培を援用したのか。（というのも、私の注記は拙稿発表の5年後になって初めて付したものであったからです）。

いったい何を問題になさりたいのでしょうか。貴方はご自身が私の著作のなかに認める特質をフランス的だといって喜んでおられる。なにゆえ貴方は、私自身が自然なものと感じているこの特質を人工的に培わせようとなさるのか。（しかるに貴方は自然だと感じてこそやっとな私の特質を愛してくださるというわけです）。私は自分の特質をフランス的教養と、それに勝るとも劣らず私のフランス人気質に負っています（そしてフランス的教養が私にとって佳きものであったのは、なによりも私がフランス人だったからです。言うまでもないことです）。ラシーヌが存在していなかったならば、そのぶん私はフランス的な考え方をしなくなったでしょうか。ラシーヌが私より後に生まれたならば、貴方は彼にむかって次のように言うのが有益だとお考えになるのでしょうか。すなわち「フランス的な考え方・感じ方を身につけるためジッドを学びたまえ」と。——然り、私は何があろうとフランス人であり、ベルギー人のような感じ方をすることはしないのです。

親愛なるルイ、私はこの家の人間です〔フランス人たる私は、仮にフランス的教養を磨かなくとも、もともとフランス的感受性を身につけている、の謂〕。教義が私を不快にさせるのは、ただ似非論者が私にたいし直に唱えてきたときのことであって、それ以外の点で教義が私を不快にすることはないし、感激させることもありません。すなわち私に向けられたものではなく、なんら訴求力はないのです。

なぜ貴方は、拙著の他の部分から切り離して、影響にかんする私の講演だけを好まれるのか。同じ趣旨を私は拙著のいたるところで繰り返し述べているのに、貴方がそのことにまるで気づいておられないのが意外です。伝統や流派のための個人排除・献身の理論、それがとりわけて文化を擁護することなののでしょうか。だが、この文化の擁護ということを描いて私が何を拙著の各所で述べているというのでしょうか。どうも私には貴方がただ依怙地になって反対しているような気がするのです。

私はいつもパレスに賛同するわけではないが、それを理由に貴方はご自身の信仰にもとづき、常に私が考え違いをしているはずだと決めつけておられる。パレスの教義の一部しか攻撃しないといって非難なさるが、私が彼の教義を信じないのは何もその難点のすべてを挙げてというわけでもないのです。それと同じく私には貴方が正しいと思うことが度々ありますが、しかしなぜ貴方のほうは常に私に反対することゝ理を通そうとなさるのでしょうか。

しかも貴方自身が実に明確に論争の敏感な所を指摘しているのです——「貴方と私を隔てるもの、それはとりわけ知性観の大きな相違だと思えます。私にとって知性とは、まさに信仰（それがどんな信仰であれ）や信念の支え、感情や感受性・熱情の基盤そのものであって……」。じっさい、多かれ少なかれ知性とは必然的にそういったもの。しかし知性が意識的・意図的に〔信仰に〕従属してしまうや、知性のなしうる最も巧みな論証こそは、フランス語では「詭弁」の名で呼ばれることになるのです。バレスや〔ジュール・〕ルメートルの著作のなかで私を不快にし憤慨させるのはそういった詭弁なのです。貴方のご意見にそれを感じることは一切ありません。むしろ貴方は欺かれているのだという気がします。お言葉を最後まで引きましょう——「無数の観念を操り理屈を捏ねまわして決してひとつの確信に身を定めぬための方便ではありません」。——仮に貴方が私の姿をこのように捉えておられるならば、それは〔真の〕プロテスタント像にはほど遠いものだとお認めいただきたい。国家主義的な観点からすれば、それはそれなりに都合のよい考え方ではあるでしょう。しかし親愛なるルイ、しかと信じていただきたいのですが、我が幼年期のプロテスタント的確信に対抗するには〔…〕

〔アンドレ・ジッド〕

両書簡の内容については、その言わんとするところは至極明瞭なので、とりたてての補説は不要であろう（細かな事実関係については附註を参照）。個人的なやりとりではあったが、作家の返信に盛られた主張じたいは一般の関心を引く話題として、やがて新聞・雑誌における論議の対象となってゆく。その流れを以下に略述しよう。

公の論争の端緒となり、またジッドの知名度の高まりを証ししたのは、レミ・ド・ゲールモンレミ・ド・ゲールモンの介入であった。このメルキユール・ド・フランスの大立者は、おそらく一件を囁し立てようという幾分か邪悪な意図の下であろう、『ウィークリー・クリティカル・リヴュー』7月30日号に「移植された者たち」と題する論文を載せ、読者の注意を『プレテクスト』上述註に引き寄せながら、モーラスとその僚友バレスを公然と揶揄したのである——

自然の事物や野良仕事にさほど慣れ親しんでいないのに、畑や田園・園芸・森林などの比喩を理論の拠りどころにするのは危険である。ジッド氏はそのことをモーラス氏に、またバレス氏自身にたいして見事に示した。〔…〕おそらくバレス氏としては、人間はポプラでもなければタヌキでもない、植物に当てはまるものが必ずしも人間に当てはまるわけではない、そう答えることもできるだろう。よろしい、だがポプラがまさに地からデラシネ抜かれ、トランスプランテ移植されたものであるのに、アンラシネ根づきの典型だと説くべきではなかったのだ。〔…〕ジッド氏は物事の表裏を同時に見抜く術を心得ていたのである。<sup>20)</sup>

ゲールモンにつづき、かつてバレスの『デラシネ』に否定的な評価を下したファゲとブルムが同様の考えを明らかにすると（『ルヴュ・デ・ルヴュ』8月号および『ジル・ブラス』同月24日号<sup>21)</sup>）、モーラスとしてもはや黙したままではいられない。誇り高き王党主義者は、9月14日付『ガゼット・ド・フランス』の紙面18段をつかい、仮借のないジッド批判を展開したのである（その題名「ボプラ論争」こそが一件名称の由来）。怒りを隠さず、侮蔑的言辞を連ねて論者がとりわけ強く攻撃したのは、先に紹介したルイ・ルアールの場合と同様、作家個人のプロテスタント出自であった。国家主義的な観点から、プロテスタントであることとフランス人たることは両立不可能だと断じたのである（これはジッドの論敵、特にアンリ・マシスらカトリック陣営の論敵が以後長きにわたり繰り返す主張でもあった）。論中の一節を引けば――

『プレテクト』の著者は、丹精込めた憂愁を諦めねばならないとなると、たちまち病んでしまう<sup>プレジュー</sup>才子のひとりである。健全な知性は肯定・是認のうちに日々のパンのみならず最上の美味をも求めるものだが、ジッド氏の精神が好むのは自明の事柄、解明容易な事柄への疑念だけなのだ。子供がランプのガラスに息を吹きかけ湯気を立てる、だが炎はこの無益な蒸気をすぐに消し去ってしまう、それと同じことである。

ジッド氏はどこに「根づく」のかと問い求めているのだから、こう申しあげておこう。ノルマンディーやラングドック、あるいはパリにまして、貴兄はプロテスタントの土地・地方・国に属する人間、プロテスタント国家の御仁なのだ、と。<sup>22)</sup>

「ある優れた庭園技術の愛好家」との対話を援用し、「間引き」「植えかえ」などの術語を出して、どうにか樹木栽培について語ったモーラスではあるが、その議論は至るところで冷静さを欠く。そして長い論述を締め括るのは、猛々しい感情を剥き出しにした容赦ない断罪であった――

『プレテクト』の著者が少しばかり思慮を働かせていれば、いやそこまでなくとも、用語使用の的確さに気を払ってさえすれば、愚かな論争を避けて、諸々の結果、なかでもこのような重大な結果は招かずにすんだことであろう。[…]

氏の精神や才能、想像力の働きはとんだあ<sup>コ</sup>ばずれ女のようなもので、どこからでも眺められるといった代物ではない。ご親切で有りがたい曖昧・薄明の引き立てがあつてこそ我慢できるのであり、白日の下に晒されれば、こんな子供だましの口口などはいとも簡単に見破られるのである。<sup>23)</sup>

当初ジッドには反論公表の考えはなく、プレイアッド新版が採録した日記断

章によれば、「親愛なるモーラス、貴方をかくも苦しめ誠に遺憾」<sup>24)</sup>とだけ記した名刺を送って事態を収めるつもりであった。だがウージェーヌ・ルアールから当事者間の調停役として論争を分析する意向を伝えられると<sup>25)</sup>、これに先んぜんと『レルミタージュ』の11月号に「ポプラ論争（モーラス氏への返答）」を發表する。論中ジッドは、相手の激した非難とは対照的な抑えた筆致で、しかし教え諭す者の嚴たる姿勢は保ちつつ事の経緯をふり返る。ゲールモンへの謝意を述べたうえで、穏やかなバレス批判を介してモーラスに反駁の照準を合わせ、その術語使用の誤りを鋭く衝いたのである——

世人はバレス氏の比喩を難なく理解しており、彼の著作がそれを証立てていた。しかし、その比喩がどんなに雄弁なものであろうと、「*déraciner*」という言葉が正確な意味で通用する樹木栽培の領域では、この言葉が氏の与えようとした意味とは違った意味で使われているのはまことに困ったことである。だから樹木栽培に例証を求めても、ほとんど常に氏の理論に反するような例しか見つからないのだ。今日、語義にかんする愚かしい論争によってモーラス氏が冒した大きな誤りが、これまで世人が注意していなかったひとつの誤りを明るみに出したのである。<sup>26)</sup>

主張の正否という点ではジッドの完勝といえる論争であったが、彼は10月11日、「モーラス氏への返答」の出来を待つことなくアルジェリアに向けて旅立ってしまう<sup>27)</sup>。あたかも意識的に一件から離れんとするかのようであった。かたやモーラスのほうは、ジッドの反論を読んでのことだろう、バレスに書簡を送って自らの誤り、方法上の不備を認めざるをえなかったのである——

貴方には私ほどの責任がないのに、私に劣らずお苦しみになった〔…〕この不快な出来事についてお話したいと思っておりました。というのも、貴方が比喩を使われたのはまったく正当なことです。私が比喩をもとに論理を展開したのは許されぬことだからです。そういうやり方は曖昧な抽象論に墮すものだと私自身が常々告発してきただけに、ほかの誰にもまして許されぬことだったのです。<sup>28)</sup>

こうして論争は終りを迎えた。じじつ、ほどなくして發表されたウージェーヌ・ルアールの分析（『レルミタージュ』12月号）や、翌年11月クリスチアン・ベックが『ベルギー評論』に掲載する長い論評は、いずれも半ば公的な事後総括といった色合いが強く、もはや一般の関心を熱く掻き立てることはなかったのである<sup>29)</sup>。

## 註

- 1) Maurice BARRÈS, *Les Déracinés*, Paris : Bibliothèque-Charpentier, 1897, pp. 199-200 (*Romans et voyages*, Paris : Robert Laffont, coll. «Bouquins», 1994, p. 597).
- 2) Voir Paul BOURGET, «L'arbre de M. Taine», *Le Figaro*, 7 novembre 1897, p. 1. ちなみに『テラシネ』第7章の冒頭には次の銘句が掲げられている——「テーヌ氏はその晩年、毎日アンヴァリッド公園の辻にある一本の樹を訪れ、それを賞翫するのが習慣であった（ポール・ブルジェの「談話」）。
- 3) René DOUMIC, «*Les Déracinés* de M. Maurice Barrès», *Revue des deux Mondes*, 15 novembre 1897, pp. 457-468. Voir aussi Émile FAGUET, «Un roman de M. Barrès. *Les Déracinés*», *Revue bleue*, 20 novembre 1897, pp. 663-667 ; Léon BLUM, «Les Romans», *La Revue blanche*, 15 novembre 1897, pp. 292-294.
- 4) Charles MAURRAS, «La Querelle du peuplier», *Revue encyclopédique*, décembre 1897. (Cité par Gide lui-même dans son article «Querelle du peuplier», *infra*).
- 5) André GIDE, «À propos des *Déracinés* de Maurice Barrès», *L'Ermitage*, février 1898, pp. 81-88 (*Prétextes*, Paris : Mercure de France, 1903, pp. 53-62 ; *Essais critiques*, éd. Pierre MASSON, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1999, pp. 4-8).
- 6) Voir Maurice BARRÈS, *Scènes et doctrines du nationalisme*, Paris : Félix Juven, 1902, pp. 88-89.
- 7) Voir la note ajoutée dans *Prétextes*, *op. cit.*, pp. 60-62.
- 8) Voir André GIDE, «La Normandie et le Bas-Languedoc», *L'Occident*, novembre 1902, pp. 250-253 (*Prétextes*, *op. cit.*, pp. 63-69 ; *Souvenirs et voyages*, éd. Pierre MASSON, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2001, pp. 3-6).
- 9) Charles MAURRAS, «Les Deux Patries», *Gazette de France*, 11 janvier 1903.
- 10) ルアール家の歴史については最近刊行された次の著書を参照—— David HAZIOT, *Le roman des Rouart (1850-2000)*, Paris : Fayard, 2012. ルイが興じた「カトリック芸術」について付言すれば、同社は1929年にヴィクトル・プーセル神父のジッド批判書『アンドレ・ジッドの精神』を上梓する (Victor POUCEL, *L'Esprit d'André Gide*, Paris : À l'Art catholique, 1929)。
- 11) André GIDE, *Journal I (1887-1925)*, éd. Éric MARTY, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1996, p. 538 (21 mai 1906).
- 12) ジッド宛ルイ・ルアール書簡, ジャック・ドゥーセ文庫, 整理番号 768.15, 未刊。封筒の宛名書きは次のとおり—— «Monsieur André Gide / château de Cuverville / par Criquetot l'Esneval / Seine Inférieure».
- 13) ちょうどこの時期、ラトビア出身の東洋学者ローゼンベルグは、ジッドの仲立ちでオスカー・ワイルドやウージェーヌ・ルアール、アンリ・ゲオン、フランシス・ジャムらと知り合っているが (voir *Lecture des lettres de Fédor Rosenberg adressées*

- à André Gide (1887-1934)*, document établi et composé par Daniel COHEN, Paris : [chez l'auteur], 1996, p. 6), 彼とルイ・ルアールの具体的なやりとりについては残念ながら不詳。
- 14) 当時ルアールはラウル・ナルシーの筆名で『ロクシダン』の書評欄を担当していたが、結果的には『プレテクト』を論ずることなく終わった。
  - 15) 「反作用」とは『プレテクト』掲載の講演録『文学における影響について』の内容を踏まえた表現。
  - 16) 前出のエッセイ「ノルマンディーとバ・ラングドック」のことを指す。なお、断るまでもないが、ジッドにはルアールの要請に応じて『レルミタージュ』にラシーヌ論を寄せる考えはなかった。
  - 17) ジッドが『文学における影響について』のなかでゲーテへの影響者としてハーフェズの名を挙げ、また『アンジェルへの手紙』や書評ではジョゼフ＝シャルル・マルドリユスの『千夜一夜物語』仏語訳を詳しく論評していることを踏まえたうえでの当てこすり。
  - 18) ジッドの義妹（妻マドレーヌの次妹）ジャンヌ・ドルーアンが7月初旬、胎児を死産したことを指す。ジッドは夫マルセルにこの悲報を伝えるためサルト県ラ・フレッシュュに赴き、同月9日、彼をキュヴェルヴィルに連れ帰っていた。Voir la lettre de Gide à Henri Ghéon du 9 juillet [faussement datée du 13 juillet], dans leur *Correspondance*, 2 vol., éd. Jean TIPPY et Anne-Marie MOULÈNES, Paris : Gallimard, 1976, t. I, pp. 532-533.
  - 19) ルイ・ルアール宛ジッド書簡、個人蔵（残存するのは二折用箋1葉、両面使用の計4頁）。旧蔵者の手によるのか、ジッドの頭書き「Mon cher Louis」の後には、異なる筆跡の鉛筆書きで«(Artus)»と補われている。しかし実際の名宛人が作家のルイ・アルチュス（1870-1960）でないことは、ジッド＝ルアール往復書簡の執筆時期や記述内容の完全な一致・照応から疑いの余地がない。付言すると、これまでに現存の確認されたジッド＝アルチュス間の書簡は、『田園交響楽』にかんする1920年8月2日付アルチュス書簡（ジャック・ドゥーセ文庫、整理番号γ969.1、未刊）の1通だけである。
  - 20) Remy de GOURMONT, «Les Transplantés», *The Weekly Critical Review*, 30 juillet 1903 [texte téléchargeable sur le site *Gidiana* de l'Université de Sheffield].
  - 21) Voir Émile FAGUET, «Sur l'éducation des écrivains et d'autres mortels (1)», *La Revue* (ancienne *Revue des Revues*), août 1903 [texte téléchargeable sur le site *Gidiana*]; Léon BLUM, «M. André Gide: *Prétextes* et *l'Immoraliste*», *Gil Blas*, 24 août 1903, p. 3.
  - 22) Charles MAURRAS, «La Querelle du peuplier», *Gazette de France*, 14 septembre 1903 (sur 18 colonnes).
  - 23) *Idem*.
  - 24) André GIDE, *Journal I (1887-1925)*, *op. cit.*, p. 364 («Feuillets» de 1903).

- 25) Voir André GIDE - Eugène ROUART, *Correspondance*, 2 vol., éd. David H. WALKER, Lyon : Presses universitaires de Lyon, 2006, t. II, pp. 159-160 (lettre de Rouart du 25 septembre 1903).
- 26) André GIDE, « Querelle du peuplier. Réponse à M. Maurras », *L'Ermitage*, novembre 1903, pp. 227-228 (*Prétextes*, nouvelle éd., Paris : Mercure de France, 1913, pp. 69-70 ; *Essais critiques*, *op. cit.*, p. 126).
- 27) ジッドにとっては6度目にして最後の北アフリカ旅行。
- 28) Maurice BARRÈS - Charles MAURRAS, *La République ou le Roi. Correspondance inédite (1888-1923)*, éd. Hélène et Nicole MAURRAS, Paris : Plon, 1970, p. 415 (lettre de Maurras à Barrès, [novembre 1903]).
- 29) Voir Eugène ROUART, « Un prétexte », *L'Ermitage*, décembre 1903, pp. 249-262 ; Christian BECK, « La Querelle du peuplier », *Revue de Belgique*, novembre 1904 [texte téléchargeable sur le site *Gidiana*].